別れ

元田翔子

夏のはじめ頃、登録ヘルパーとして働いているヘルパーステーションの責任者から私の携帯電話に連絡が入った。ある利用者さんのところへ訪問介護に通い始めるために、同行訪問に行くようにという指示だった。それが田中さんとの出会いの最初だった。

同行訪問というのは、先に介護に通っているヘルパーに同行して在宅療養の利用者さんを訪問し、身体介護や家事援助に関して、その人その家なりのこまごまとしたことを教えてもらうことである。

「七十六歳の独居の男性で、末期の前立腺癌の方なの。もちろんご本人は癌だということはご存知ないから、くれぐれもその点には気をつけてね。」

同行してくれる先輩ヘルパーの説明を車の中で聞きながら、私は相当に緊張していた。末期がんという病名の恐ろしさと、それを隠し通さねばならない重苦しさに圧倒されそうだった。

田中さんは穏やかに私たち二人のヘルパーを迎えてくれた。町外れの大きな池の近くにある古い文化住宅が田中さんのお住まいだった。ベッドに腰掛けた田中さんは初対面の私の挨拶にもやさしい笑顔を向けてくれた。末期癌と言うおどろおどろしい病状からは想像もできない穏やかな表情だった。体の清拭や着替えといった身体介護と、ポータブルトイレの始末や夕食の準備片付けといった家事援助とが半々の複合的なサービスだった。私が作った味噌汁やがんもどきの煮物も、旺盛な食欲を見せて食べてくれる様子からは、癌という病名、しかも末期などという段階にある病人とはとても思えなかった。

「今日はこれからどこかへ行かれますか？」

帰りかける私たちに、田中さんは尋ねた。

「いいえ。今日はこれで仕事は終わりです。」

そう答える私に田中さんは

「ご苦労様でした」
と、優しい言葉をかけてくれた。
田中さんの介護は朝昼夕の一日三回数人のヘルパーが交代で担当していた。私も週二回程度の割合で訪問する日が続いた。いつも穏やかな表情で、やさしい労いの言葉をかけてくれ、何を作っても美味しそうに平らげてくれた。
普通は初回訪問に先立ってその人の個人資料に目を通しておくのだが、田中さんの場合は、突然の電話による指示だったため、私は田中さんについては末期癌と言う病名しか知らないままに介護に通っていた。そして、ミーティングの話し合いのなかで田中さんのもうひとつの病名を知らされることになった。
“うつ病“　　とても信じられない病名だった。田中さんがいつも見せている穏やかな表情が薬物でコントロールされた結果のものだったとは、驚き以外の何者でもなかった。
若いころ一度結婚したが、うつ病で精神病院へ入院したために、離婚させられて、それ以来独身なのだという。生活保護費が入るため暮らしはさほど不自由がないらしい。
過去の入院暦も相当に長かったようで、病院から工場へ働きに行っていたということだった。その間の工場からの賃金を貯金しておいたために、家を借りて独居生活が出来るようになったのだというのは田中さん本人が私に語ってくれたことである。
家庭環境もずいぶん複雑で、生家は飛騨の高山だが、身内との音信も途絶えているというか、自ら過去の血縁関係を閉ざしてしまっているようだった。寂しいからと、訪問するヘルパーとの会話を楽しみにしており、どのヘルパーにも優しかった。
しかし、本心のところは、介護ステーションの責任者を
「沙紀ちゃん」と呼んで最も信頼し、好いてもいた。
“沙紀ちゃん“と手をつないで買い物に行き、沙紀さんが
「田中さん、まるで夫婦みたいやな」
と、語りかけると
「親子やろー」
と照れながら言い返したと、沙紀さん社長ががうれしそうに言うのを、周りのみんなも微笑ましく眺めていた。
秋のはじめごろ、快調に見えていた田中さんの体調にかげりが見え始めた。
三九度の熱が出て、下痢が始まった。本人は風邪だと思っているようだったが、熱と下痢

の他には風邪らしい症状も見えないので、私はひそかに心配した。
（がん細胞が暴れだすときに、熱が出ると聞いたが・・・）
沙紀さんは
「風邪で下痢をしているのだから、落ち着くまではお粥だけ食べてもらうように」
と、みんなに指示を出した。
沙紀さんもわかっているのだろう、それでも、ただの風邪だと信じたいのだろうと私は解釈した。下痢が収まったときに最後の小康状態が訪れた。
そんなある日、沙紀さんから電話があった。
「今日の田中さんの夕食、焼肉が食べたいとおっしゃっているから、美味しい肉を買っていって、焼いてあげてください。」
私は、行きつけの肉屋で上等の肉を買っていって、キャベッツの味噌汁と、焼肉を食膳にのぼらせた。
「ああ！うまい」「この味噌汁もうまいですわ」
田中さんの満足の声を聞いて私はうれしかった。
「ご馳走様でした」
「美味しく召し上がれて、よかったですね」
そういうやりとりのあと、台所を片付けていると、田中さんが外へ出て行ったので様子を見に行くと、
「小便してきた」
と、外から帰ってきた。
私がポータブルトイレを洗ってあったので再度手数をかけるのを遠慮して外の草むらでオシッコをしてきたらしかった。
夕日の中で、田中さんと私は、しばらく立ち止まってなんとなくあたりを見渡していた。
その日はとてもいい天気だった。爽やかに秋風が夕日に染まった植木を渡っていた。
「いい風ですね」
言いかけて、田中さんの顔に目を移して私はその顔色のあまりの悪さに、絶句した。
（もうこうして外を歩けるのも最後かもしれない）
そう予感した。そして（池の辺りまで散歩しませんか）　という言葉がのど元まで出かけたが、あやうくその言葉を飲み込んだ。
（転んで骨折でもされては大変なことになる）

という、心配というか、自分を守る思いがやさしさをねじ伏せた。
（あの時、夕日に光る池のさざ波を田中さんに見せておいてあげればよかった。）
後々になって、その思いが何度となく私をさいなむことになった。

そのころから、だんだんと食欲がなくなり、体のあちこちが痛むらしく、お灸を数十個もすえ始めた。そして、民間療法の本に、お灸と西洋医学は相反するものだから、医者の薬はやめるようにと書いてあったという理由で、病院から処方される薬を飲まなくなった。ケアマネージャーが説得に努めたがだめだった。

精神病院から処方されていた薬も飲まない日が続くと、少しずつ目がギラギラしてき始めた。言動もおかしくなってきた。天体望遠鏡を買うのだと、カタログを取り寄せた。顕微鏡も双眼鏡も買うのだといい始めた。ポータブルトイレも大型のを購入し、それが大きすぎると怒って部屋の隅へ押しやったりした。週二回通っていたデイサービスの入浴にも行かなくなった。デイサービスの職員の対応が気に食わなくなってきたらしかった。

「お風呂はどうされるのですか」
と、尋ねると
「沙紀ちゃんの家で入れてもらいます」
とのことだった。

ある朝、私は田中さんの家の前で、近所の主婦二人から呼び止められた。
二人は相当に興奮した口調で、早く田中さんを病院へ入れてほしいと迫ってきた。
田中さんが夜中に大声を出したり、ラジオをガンガン鳴らしたりするというのだった。
一生懸命に謝ったが、周りにすんでいる者の身にもなってと、突っぱねられた。
いよいよ、在宅介護の限界かという、ケアマネージャーなどの判断で、内科病院へ入院したが、一週間ほどで退院してきた。病院でも持て余されたということらしかった。
“沙紀ちゃん”の必死の説得でようやく薬を飲み始めたが、一旦再発した精神症状はなかなか治まらなかった。というよりも、体を責めさいなむ末期がんの苦痛が、精神安定剤の効用をもねじ伏せてしまうほどに、はげしいものだったのかもしれない。

ある日、私は“沙紀ちゃん”の電話を受けた。
緊急に田中さんのところへ行って、新しく処方された睡眠薬を飲んでもらってくるように

という指示だった。近所からのクレームを少しでも少なくするために、夜はとにかく眠ってもらうように、新しい睡眠薬を貰ってきたから、飲んでもらうようにとのことだった。
「私が行けばいいんだけど、介護保険の請求の書類も作らなければならないし、私が行くとなかなか帰してもらえなくなりそうだから、行ってきてください」ということだった。
そして私は、夜九時から田中さん宅へ行った。結果としてそれが最後の訪問介護となった。
ほとんど何も食べなくなっていた田中さんに、少しでも口から何かを入れてもらおうと、果汁を作った。
「うまい」
と、十さじ飲んでくれたが、それ以上はだめだった。
そして、沙紀ちゃんから預かってきた睡眠薬を飲んでもらった。
すぐに、効いてくると思いのほか、眠りはなかなか訪れなかった。
しきりに話しかけてきて、とても帰るどころではなくなった。
少しでも元気を出してもらおうと
「また春になったら、ヘルパーステーションの皆と、花見に行きましょうね」
と、私が言うと田中さんは遠くを見る目になって答えた。
「春には、高山へ行きましょう。飛騨の高山・・・いい所ですよ。」
と、それまで拒否していた故郷のことを言い出した。
「高山の民宿に泊まって、祭りの餅を買うてきて、みんなで食べましょう。私は餅を十本買います。高山の餅、うまいんですよ。沙紀ちゃんの車にみんなで乗っていきましょう」
田中さんのまなざしが、夢見るように輝いた。
　眠りはなかなかおとずれなかった。
ベッドの横の襖があちこち破れていて、私は数日前の訪問の際に、その破れを繕っておいたがまだまだ残っていた。田中さんの目がその破れをとらえた。
「貼ってください。時間は取らせません」
（時間はとらせない）
その言葉に、時間区切りでやってきて、帰っていくヘルパーのサービスの限界と、独居の闘病生活の苦しさが凝縮されているように思われて、私は胸がつまった。
「あそこにも月を貼ってください。あちらには、大きい星を一つ、そこに小さい星を・・・」
田中さんが次々に指し示す、ふすまの破れに切り抜いた紙を張っていくと、四枚の襖は星座を散りばめた夜空の観を呈してきた。何日か前に、天体望遠鏡のカタログを取り寄せよ

うとしていたことを思い出して、私は思わず涙ぐんだ。しかし、その次に田中さんが言った言葉で大いによろこび、それからむくれた。

「きれいにしてもらってありがとう。あんたは、何でもよう知っているひとやねー！

沙紀ちゃんより、よう知っとる人や。年の功やねー」

最後の一言さえなければ、と思った。四十歳の沙紀ちゃん社長と六〇歳の私との二十歳の年齢の差は覆うべくもないのか、と大いに鼻白んだことだった。

然眠気が襲ってきたらしく、田中さんが目を閉じたので、私は足音を忍ばせてそーっと田中さん宅から帰った。しかし、何か不安がきざしてきて仕方がなかった。明日の朝まで無事に眠ってくれるだろうかと、心配だった。介護保険の請求の書類を作るために徹夜をするつもりらしい沙紀さん社長に電話を入れようか迷いながらも、そのまま家へ帰った。

やはり、破局はきた。

翌朝、田中さん宅へ行った沙紀さんは満を持して待ち構えていた近所の人たちから、もう一日も我慢できないと迫られた。

夜中に、ガンガンあちこちをたたく音と叫び声と、呼び寄せられた救急車の音で、眠れなかったというのだった。家に入って見ると、ガラスは割れ、緊急通報用の電話はコードを引きちぎられており、呼んだ救急車は来るのが遅かったから追い返したと言って、田中さんはひどい興奮状態だったということだった。

大好きな沙紀ちゃんの説得で、田中さんは精神病院へ緊急入院することになった。

その病院でも、夜中になると騒ぎ出して、随分周りを悩ませたようだが、交代でお見舞いに行くヘルパーたちの顔は見分けて、喜んでくれた。腕をベッドに止められた状態は痛々しく、病院の看護婦さんも、ヘルパーに気を使うらしく

「お見苦しいでしょうが仕方がないので・・・」

と、ベッドの柵にくくられてある手をかくすようにした。持参するお見舞いの食べ物も、咽詰めの恐れがあるからと、断られた。

吐血などの内科的症状が出ると、一時的に近くの内科病院へ転院させられた。

内科病院に入院中は、二四時間ヘルパーが付ききりなることが要求された。そうでなければとても引き受けられないということだった。沙紀さん社長は、シフトを組み替えたり、関連のヘルパーステーションに応援を頼んだりして、病院の提示した条件に応じた。

「悪いけど、田中さんの病院付き添いだけは、七五〇円の時給でがまんして」

そういって、ミーティングでヘルパーたちに協力を求めた。

私も当番で、田中さんの病室へ行くと、まだ意識はしっかりしていた。
栄養補給なのか、痛み止めなのか、点滴の管にはつながれていたが、血管確保がなされているらしく、腕をかなり動かすのだが、点滴漏れは起こっていなかった。
「今日は、これからまだどこかへ行かれますか。」
「いいえ、田中さんのところで終わりなんですよ」
在宅で介護していたときの、決まり文句を思い起こしたような会話のあと、
「歌を歌ってください」
と、言われた。
田中さんの自宅へ訪問介護している間に、よく聞かされていたことに、
「暗い歌はきいらいだ。デイケアの職員で忘年会なんかで暗い歌を歌いだす人がいて、それがいやでたまらない」
という言葉があったのを、思い出した。時々訪問看護に通う看護婦さんに、聞かせてあげていた歌の中に、それがあったことを思い出し、
「春のうららの隅田川」
と、歌詞もあいまいなままに一番だけ歌い終えた。
点滴につながれた田中さんの両手が拍手を送ってくれた。次にまた歌ってと、何かの歌詞の一部を歌ってみせるのだが、それが何の歌なのか私にはどうしてもわからなかった。
（明るい歌、明るい歌・・・）
と、心の中で探しながら、リンゴの歌とか、早春賦とか、はてはチューリップの歌まで歌ってみるのだが、田中さんが聞きたい曲とは違うらしく、際限もなくまだまだと要求され、私は疲れ果てた。そして、交代してくれる沙紀さん社長が来てくれると心底ほっとした。
「今から朝まで・・・。大変ですね」
私のねぎらいの言葉に沙紀さんは
「やらんと仕方ない」
と、元気に答えた。

そして、一週間後には再び精神病院へ帰された。もう手のつけようもないと判断されたようだった。再び手首をベッドに固定された状態で二ヶ月間入院した後、高熱を発した田中さんは、遠くの、内科も精神科も兼ねている病院へ送られた。肺炎ということだった。
入院後十日目、田中さんが意識を失ったという連絡が病院から沙紀さん社長の元へ寄せら

れた。沙紀さんは、それまで介護に当たった数人のヘルパーを車に乗せ、お見舞いに行った。

田中さんは、肩枕を当てられて、大きく喘いでいた。

「意識が戻ることはあるのでしょうか」

と、沙紀さんに尋ねられた担当医は

「わからないねー。この人は、ここへ来たときは肺炎だった。暴れてこんなになったレントゲン写真が映っていたけど、今は肺炎は治っているよ。」

医者は、自らの上半身を捻じ曲げるようにして、撮影時の田中さんの姿勢を再現して見せてから続けた。

「肺炎は治っていても、この人にはベースに癌があるからねー。悪液質とかいろいろでてくるから・・・。それに糖尿病もあるし、もし、糖尿病のための昏睡だったら、治療が効いてもう一回意識が戻ることもあるかもしれないが」

沙紀ちゃん社長は

「田中さん、ごめんな」

と、手を握った。ヘルパーたちも、それぞれに田中さんとの交流を思い浮かべて、感慨にふけった。

帰りの車の中で

「転院したときには、まだ私のこと判ってくれていて　沙紀ちゃん　って言ってくれたんだもの、もう一回意識を戻して　沙紀ちゃん　って言ってもらわんと」

と、つぶやく声が聞こえた。

それから三日後が田中さんのお葬式だった。簡素ながら、心のこもった扱いをしてくれる葬儀社だった。

参列しているのは主治医と介護にあってきた人たちだけ、一対の生花は沙紀さん社長のヘルパーステーションのものだった。

沙紀さん達と、海へ行ったり伊勢へ一泊旅行したりした写真を数枚胸の上に乗せて、穏やかな表情に戻った田中さんの棺が閉じられようとしていた。

式を取り仕切っていた葬儀社の社長らしい恰幅のいいおじさんが、

「人形抱いて行きやーって、棺の中に入れてやってやー」

と、沙紀ちゃんに渡したのが、タイガースの服を着た人形だったので、私は

（この人阪神ファンかー）
と、内心あきれた。

それから一月、田中さんの遺影は、ヘルパーステーションの片隅に置かれている沙紀さんたちと伊勢へ旅行したときのうれしさをかみ殺したような表情の写真である。
いつとはなしに、沙紀さん社長に、（いい線いっている人がいるらしい）
という、噂が流れはじめている。
未亡人の彼女にいい人が出来たって、誰も文句を言う筋合いのものではないが、
私は亭主持ちにかかわらず、ちょっぴりうらやましい。
四十歳の沙紀さんに六十歳の私が使われていることに、内心忸怩たるものがないわけでもなく、
（もし、ヘルパーしながら勉強して、介護福祉士の資格なんか取っちゃたら、沙紀さん社長よりえらくなった気分になるかも、いやいや・・・ケアマネージャー資格なんか取っちゃったら、本当にえらいぞー）
（ばかー。呆けたんかー。なに出来るはずもないこと考えとる）
と、自問自答する。
「見ざるべき　こともあらかた見つくして　今なにを見る大空を見る」
という、与謝野寛の歌が思い出されるのもそんなときである。
見上げる空からは、田中さんがニコニコして見下ろしてくれているようにも思えてくるのだった。